

次世代を担い、農業の未来を拓いていく若手農業者。彼らとビジョンを共有し、夢を実現させようと奮闘するTAC。二人三脚、模索を続けながら生活者に思いを伝える姿をレポートする。

□ 千葉県 JA長生

□ 滋賀県 JAこうか

□ 岩手県 JA新いわて

☑ 栃木県 JAしおのや

□ 長崎県 JA島原雲仙



▼JAしおのや TAC 谷田幸政(左) 若手農業者 和氣達哉(右) ④

▼若い担い手との接点づくりが産地の元気には欠かせない⑤

▼もち米を「揚げもち」にして販売。加工に力を入れる⑥

大規模化と付加価値づくり

「おいしく、安心して食べられる米に付加価値を付けて、いろんな形で食べてもらいたい」

栃木県塩谷町の(株)和氣ふあーむは、水稻を中心に約80%の農地を大規模経営する農業法人。取締役の和氣達哉(39)は、代表の父・勝英(63)を支える3人兄弟の長男だ。

同社は、米、麦、大豆、ソバの他、冬場の仕事を確保するためハウス栽培のホウレンソウやニンニクも作る。これまで、高齢化した農家などから農地を借りて規模を拡大。現在は、父母・兄弟の家族5人と従業員3人が働き、大規模な農業経営を行うことで、地域の農業を守っている。

「おいしいだけでなく、安心して食べてもらいたい」。そんな思いから水稻栽培の半分にあたる約30%で減農薬・減化学肥料の米づくりを実践。一部では無農薬栽培も行う。販売先は生協が中心で、JAなどの農産物直売所にも並ぶ他、地元の飲食店やスーパー、ホテルに直接販売も行う。

JAしおのや営農支援課の谷田幸政(38)は、TACとして同社を訪問。いつもは代表と話すケースが多いが、今後は20～30代の「若い担い手との接点づくりが大切」と考えている。谷田自身、JAに勤める傍ら、3%で水稻を栽培し、認定農業者やエコファーマーにもなった。米価が低迷する

中でも、「若い人が農業をやっている環境づくりをした」と話す。自分の経験も活かしつつ、地域農業を元気にできるよう支えていく考えだ。

もっとたくさんの「おいしい!」を求めて

和氣は20年ほど前、国際農業者交流協会のプログラムを活用し、アメリカで2年間、農業を研修。畑作を学び、桁外れの規模を肌で感じた。それで自分でも農業を始めたくなり、予定していた就農時期を10年近く早めたという。

同社は今後、100%まで規模拡大する計画だ。さらに和氣は加工・販売も手掛ける6次産業化で所得向上を目指すため、「加工の分野で力をつけたい」と話す。

すでに県内業者に加工を委託し、小麦をうどんの乾麺

にもち米を「揚げもち」にして販売。昨年11月からは自社で、もちの製造・販売も始めた。

将来的には加工場をつくり、おにぎりなどの販売も目指す考え。「精米5%」でなく「おにぎり1個」からの方が食べてもらいやすく、「和氣ふあーむの米の良さを、より多くの人にわかってもらえる」利点もあるからだ。幅広い層のファンづくりも意識し、県外小学校の修学旅行受け入れ支援などにも取り組んでいる。

「一番のやりがい、生活者の方々から『おいしい!』という言葉をもらうこと」と和氣は話す。就農を早めた分だけ、その言葉をもらえる機会は増えた。これからも直売所で、レストランやホテルで……もっとたくさんの「おいしい!」を求めて、和氣は夢を膨らませていく。(敬称略)



TAC(タック)とは、
『地域農業の担い手に出向くJA担当者』の愛称です。

TACの役割

- ①地域農業の担い手に訪問してご意見・ご要望をうかがい、誠実にお応えします。
- ②地域農業の担い手の経営に役立つ各種情報をお届けします。
- ③地域農業の担い手のご意見を持ち帰り、JAグループの業務改善につなげます。

TACの由来

Team for Agricultural Coordination
JAグループが一体となって
地域農業をコーディネートします。

営農販売企画部 TAC推進課
TEL: 03-6271-8276 www.zennoh.or.jp

全農